東北地方太平洋沖地震を経験して

農林中央金庫　仙台支店長　竹田正雄

はじめに今回の東北地方太平洋沖地震で犠牲になられた皆さまに心からお悔やみを申し上げるとともに、今なお大変な日々を過ごしておられるすべての被災者の皆さまにお見舞い申し上げます。あわせて、被災地、被災者に対しご支援、お見舞いをいただいた全国の皆さまに、この場を借りて心からお礼申し上げます。誠に有難うございました。

今回の大震災については既に多くの報道がなされていますが、以下本稿では現地での個人的な被災体験、その時なにが起きたのかを備忘的な意味を含めて記すこととしたいと思います。

その時、平成23年３月11日14時46分、私はJAビル宮城の６階会議室で被災した。突き上げるような縦揺れの直後、激しい横揺れが続いた。はじめは「揺れは大きいものの、しばらくすれば治まるだろう」と考えていたが、いつまでたっても揺れが止まる気配すらしない。激しい揺れで机の下にもぐることすらできず、ただ机にしがみついているしかなかった。パーティションの壁が倒れ、天井の石膏ボードが落下し、しがみついているキャスター付の会議机は右に左にと大きく動いた。そんな状況が２分も３分も続くと、さすがに「このまま揺れが止まらないのではないか、ビル自体が折れるのではないか」との恐怖が襲ってきた。最終的にどの位の時間揺れていたのか、正直なところ覚えていない。ただただ「治まってくれ」と願っているうちに、ようやく揺れが止まった。

その後の一連のできごと、事務所に戻っての職員の安否確認（出張者等を含め４日かかったが幸いにも全員無事だった）、ビル管理事務所からの退避指示によるビル外への一時避難、ビル前広場でのJAグループ宮城災害対策本部会議の招集、再度ビル内に入館し非常用電源による端末の締め処理、全員の帰宅などが強い余震が続くなか無我夢中で進んでいった。ラジオでは津波襲来が報じられていたが、まさかあのような大津波で多くの犠牲者が出たことなど、電気が回復しテレビを見ることができるまで想像すらできなかった。

今回の大震災で困ったのは、通信を含めたインフラ機能の停止とガソリンの不足だった。

仙台中心部の生活インフラの再開は、電気が３日、水道が10日、都市ガスが１か月だったが、これは県内ではかなり早いほうである。もっとも、電気が通っても点検が終わるまでエレベーターは動かず（ちなみに支店長住宅はマンションの13階）、水道は回復しても受水タンクの影響で２週間使えないなど、日常生活に戻ったと実感したのはやはり１か月たってからだった。

業務再開にあたっての最大のポイントは電気の回復だった。後ほど触れるが、地震の翌日に本店と連絡がとれ、職員の安否や状況確認後に週明け14日からの業務再開に向けた取

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。
農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/

組み（被災JAの代行貯払いを含む）を指示されたが、県域システムの元締めである県農協電算センターのシステムが稼働しなければ県内JAの窓口端末、ATMは稼働しない。システム本体は無事であったが、電気がネックとなったのである。結果的には13日までに電気が回復したため、予定通り14日からシステムを稼働できたが、一時は最悪の事態を想定し、非常用発電機の残り10時間分の燃油を温存するためシステムを一時停止させるという場面もあった。

通信手段の確保はもっと切実な問題であった。JAの状況を確認しようにも、緊急貯払いの要請をしようにも、とにかく県下JAとの連絡が取れないのである。結局は、毎日開催される災害対策本部会議で、中央会、県連と情報の共有化を図ることや通信の回復、金庫・JA間でお互いに行き来することで少しずつJAの被害状況が分かるようになってきたのである。

また、金庫本店との連絡であるが、私の業務用携帯は「災害時優先電話」だったが震災直後から発信、受信とも全く不能となり、丸一日のあいだ支店と本店間は連絡が取れなかった。奇跡的に支店長住宅の固定電話がつながって本店に安否情報を伝えることができ、また支店のIP電話で本店とのラインが完全に確保できたことが、その後の業務回復に威力を発揮した。

次に深刻な問題はガソリンの確保であった。停電によりガソリンスタンドはほぼ100％麻痺し、電気が回復した後はガソリンを求める車が殺到して品薄の状態が４月第３週ぐらいまで続いた。現金輸送や県内メール便をお願いしていた日本通運からも、16日には現送を休止する旨の通知を受けたほどである。JAバンクの県域本店機能を担う当支店にとって、現金の供給は最大の使命の一つである。直ちに自前で現送車を走らせる検討をはじめ、県警からの緊急車両ステッカーの入手、支店保有全車両のガソリン残存量の確認と自動車利用にかかる一元管理などを行った。この間にプリウスなど新しい車両は、給油口からガソリンを抜くことができないようになっていることが分かり頭を抱えるといったこともあったが、これも今では笑い話である。

いろいろあったが、曲がりなりにも週明け14日からの業務再開ができた。これも本店各部、関係者のご支援の賜物であるが、なによりも困難な状況下、各自で通勤手段を確保し、ともに業務再開に尽力してくれた支店職員の皆さんに私からは最大限の賛辞を贈りたいと思う。まだまだ回復までの道程は険しく、また時間もかかるだろうが、被災地の一日も早い復興を心から願い、支店のメンバーでそのために全力を尽くすことをお約束する。

最後になるが、自らが被災者となって初めて分かったことがある。それは「頑張る」は他人を応援する言葉ではなく、自分を鼓舞するための言葉であるということだ。災害時には頑張ろうにも頑張ることのできない人がいること、茫然自失でどう頑張ればよいのかわからない人がいることを皆さんの頭の片隅にでも置いていただけると幸いである。

（たけだ　まさお）

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。
農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/